

## <研究ノート> *Heureusement que P* の用法に関する一考察 Une considération sur des emplois de *Heureusement que P*

宮腰 駿

Cet article examine les emplois de la structure *Heureusement que P*. Suivant l'étude de Guimier (1998), nous considérons que cette structure construit le contexte du type : *Heureusement que P ; si-non P, alors Q*. L'analyse de plusieurs exemples révèle une grande variété de manières de construction de ce type de contexte.

キーワード：副詞 *heureusement* (adverbe *heureusement*), 接続詞 *que* (conjonction *que*), 副詞 *que* (adverbe *que*), 文副詞 (adverbes de phrase)

### 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿は副詞 *heureusement* に接続詞 *que* が後続する単位について、文脈に注目した用例分析を行うことを目的とする。

Adverbe *que* の構造はしばしば「変則的 *anomale*」(Le Goffic 1993, 522) や「異常 *aberrante*」(Furukawa 2005, 123) といったように特殊なものであるとみなされてきた。しかし、この構造は多くの研究者の関心をひきつけており、(1)のような *heureusement que* (以下、HQ と表記) を中心に様々な研究が行われてきた (Anscombe 2016, 2017, Bacha 1998, Borillo 1976, Culioli 2018, Delahaie 2011, 2014, 2018, Furukawa 2005, Gaatone 2012, etc.)。本稿では他の副詞を考慮に入れずに、HQ に絞って議論を行う。

#### (1) *Heureusement que* Pierre est là. (Furukawa 2005, 125)<sup>2</sup>

幸いなことに、ピエールがいる。<sup>3</sup>

文法書 *Le Bon Usage* において HQ は「平俗的な言語 *langue familière*」に特にみられると記述されている (Grevisse et Goose 2016, 1564)。しかし、Gaatone (2012, 1731) は「入念な言語 *langue soignée*」においても珍しくはないと述べている。したがって、HQ については特定のタイプではなく、むしろ様々なタイプのテキストに生起することを想定して、観察を行うことが有益であると考えられる。

<sup>1</sup> 本稿は東京フランス語学研究会第59回研究会 (2024/4/20) および TAME 研究会 2024 年度第2回研究会 (2024/7/26) での発表内容に大幅な修正を加えたものである。貴重なご意見やコメントを寄せていただいた参加者の皆様に感謝申し上げます。なお、本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム (JPMJSP2108) の支援を受けている。

<sup>2</sup> 用例分析において注目する形式については斜字ボールド体で示す。

<sup>3</sup> 訳書がある場合は書誌情報を記す。書誌情報が示されていない場合は本稿筆者による翻訳である。また、本稿が引用する URL の最終閲覧日は 2024/12/8 である。

2021年に出版された文法書 *La Grande Grammaire du français* では、HQは「adverbe + que」の構造をとる独立文 *phrases indépendantes en adverbe + que* というラベリングのもとで取り扱われている (Abeillé et al. dir 2021, 894)。ここでの独立文とは、他の文に統語的に依存しない文である (ibidem, 8)<sup>4</sup>。たしかに、表記の上で(1)はポワン (.) を末尾に持ち、文として完結していると考えられる。

このように統語的に分析されている HQ であるが、この単位は実際に発話される文脈においてどのような機能を持つのだろうか？本稿ではこの問いを検討するために、用例の観察を行う。

## 2. 先行研究の批判的検討と問題の所在

ここでは副詞 *heureusement* に関する Lamiroy et Charolles (2004) の研究を最初に取り上げる。この研究は、*simplement* / *seulement* / *malheureusement* / *heureusement* という4つの副詞について「連結辞 *connecteurs*」という観点から分析を行ったものである<sup>5</sup>。この研究では様々なテストによって、各副詞が連結辞としての機能をどの程度有しているのかが明らかにされている。

連結辞の概念に基づく分析において特に注目されているのは、以下のような接続詞 *mais* と置き換えできる副詞の用例である。

(2) Depuis le début de l'Intifada, mon activité avait baissé d'environ 50%. *Heureusement*, j'avais encore un gros client qui me permettait de tenir le coup. (*Le Monde*, 2003/06/02, cité dans Lamiroy et Charolles 2004, 57)

インティファダがはじまって以来、私の活動力はおよそ 50%低下しました。しかし幸いなことに、わたしには持ちこたえることを可能にしてくれる大顧客がまだいたのです。  
(宮腰 2023, 53 による翻訳)

たしかに、ここでの *heureusement* は「インティファダによって苦勞が生じていたが、自らを支える顧客がいた」という対立の構造を持つ文脈の中で、2つの命題を結合する位置に置かれている。

副詞研究ではしばしば文副詞について「合接詞 *conjonctifs*」および「離接詞 *disjonctifs*」という2分類が設定されることがある (cf. Nölke 1993, 中右 1980, 宮腰 2023, etc.)<sup>6</sup>。前者は接続機能を持

<sup>4</sup> Une phrase simple ou complexe qui ne dépend syntaxiquement d'aucune autre est appelée *indépendante*, ou phrase *racine*. (Abeillé et al. dir 2021, 8)  
統語的に他のいかなる文にも依存しない単文あるいは複文は、独立文あるいは基底文と呼ばれる。

<sup>5</sup> *connecteur* の訳語は *donc* / *alors* / *aussi* / *ainsi* に関する渡邊 (1995) のものを採用した。

<sup>6</sup> Molinier et Levrier (2000, 49) では両者は以下のように区別されている。

La classe des *conjonctifs* rassemble des adverbes définis par leur inaptitude à figurer dans l'énoncé initial d'un discours ou de manière plus spécifique, par l'exigence d'un contexte gauche auquel ils renvoient. [...] Les *disjonctifs* sont complémentaires des *conjonctifs* dans la classe des adverbes de phrase. (idem)  
合接詞のクラスは、談話の最初の発話文に生じることに不適であること、あるいは、より特定の

つ副詞としてとらえられる。この2分類を採用する Molinier et Levrier (2000, 87) では、テストを通じて文副詞としての *heureusement* は離接詞として扱われている。しかし、*mais* との置き換えができる(2)のような用例の存在をふまえると、*heureusement* について接続機能を見出す Lamiroy et Charolles (2004) の立論は機能分析としては有効であると考えられる。

*heureusement* を含む-ment 型の文副詞を「談話マーカ-*marqueurs discursifs*」として記述する Paillard (2021, 36) は Molinier et Levrier (2000) 等の研究を批判して、-ment 型の談話マーカ-について、左方文脈がその働きに関与することを主張している。つまり、Lamiroy et Charolles (2004) の *heureusement* に接続機能を見出すという議論は、他の研究においても類似したものが見られる。

このように実際の文副詞の用法分析においては、左方文脈との関係は常に考慮すべき要素と考えられる。しかし、様々な副詞に接続機能を認めるという見方は文副詞の機能記述として十分であるといえるのだろうか。接続機能に注目する分析は、あくまで接続される左方文脈と作用域の関係を中心にした見方に基づいていると考えられる。

HQ では *que* 節以下が作用域ととらえられる。実際、Lamiroy et Charolles (2004) から引用された(2)、ならびにこの研究が引用する HQ の例(3)では左方文脈および作用域が示されており、2項の接続という観点で用例が検討されている。たしかに、HQ を通じて2つの命題は関係づけられることになるが、それらもあくまでより広い文脈の中に置かれているものである。

- (3) « La porte du garage était ouverte », souligne le commandant Christian Jeandemange, chef de garde départemental. « Le gaz n'a pas pu s'accumuler. **heureusement que** la première explosion n'a pas été suivie d'un incendie. » (*L'Est Républicain*, 2003/04/26 cité dans Lamiroy et Charolles 2004, 74)

「ガレージの扉はあいていました」と司令官 Christian Jeandemange (県の警備長) は強調する。「ガスはたまることができなかつたのです。幸いなことに、最初の爆発は火災にはつながりませんでした。」

そして、Delahaie (2018, 258) も HQ について、その意味構造は常に *p heureusement<sub>2</sub> que q* であると主張している<sup>7</sup>。この記述でも関係づけられる2項が構造的にまずは考慮されている。

複数の先行研究に見られる接続機能に注目した議論を発展させる余地があると考えられる。残されているのは、HQ による左方文脈と作用域の接続がより広い文脈にどのような影響を及ぼすのかという問いである。そして、HQ が生起することで文脈の流れが変化するならば、HQ の作用域以降の文脈が持つ特徴に着目することが分析の指針として妥当であると考えられる。

この問いからみて注目できるのは(4)の辞書用例である。これは *Larousse* のオンライン辞書にお

---

に言えば、参照する左方文脈を必要とすることによって定義される副詞を集めたものである。

[...] 離接詞は文副詞のクラスにおいて合接詞に対して相補的である。

<sup>7</sup> Delahaie (2018) では文副詞的な用法が *heureusement<sub>1</sub>* とまとめられ、HQ および *heureusement* 単独での用法が *heureusement<sub>2</sub>* とまとめられている。

ける *heureusement* の項目に見られるものである。この用例は *que* 節の構造だけを示すのではなく、接続詞 *sinon* を後続させている。辞書の用例が形式の機能を端的に示すものであるならば、わざわざ HQ に *sinon* が後続する例を示している点は注目に値する。

(4) *Heureusement que j'étais averti, sinon j'aurais commis l'erreur.*<sup>8</sup>

幸いなことに私は注意を受けていました。そうでなければ、間違いをしていたでしょう。

この種の用例への注目は、この辞書記述に限った話ではない<sup>9</sup>。Guimier (1998, 170) は副詞に *que* が伴う構造を好むコンテキストの 1 つとして *Adv. que P, sinon Q* および類似した構文を挙げている。より詳しく言えば、HQ は以下のような「発話文の一般スキーマ *schéma général de l'énoncé*」と相性が良いと考えられている (*idem*)。

(5) *Heureusement que P ; si non-P, alors Q (au conditionnel) (idem)*

幸いなことに P であった ; もし P でなければ、Q である (条件法に置かれる)

ここでは *que* 節の中で示される内容 P とは異なる可能性 non-P (P の否定) が後続する文脈で検討され、その仮定の上で Q が述べられるという構造が示されている。HQ による左方文脈と作用域の関係づけが、より広い文脈にもたらす作用をこのスキーマは端的に表していると考えられる。すると、これは HQ に関する議論を接続機能に注目する段階からさらに進展させるために考慮に値する構造であると考えられる。

本稿ではここまでの先行研究の批判的検討に基づき、HQ が文脈の構造(5)を構築する機能を持つという仮説から用例の観察を行う。そして、HQ に接続詞 *sinon* が常に後続するという仮定ではなく、あくまで(5)のスキーマが多様な形で構築され则认为る。

以下では様々なジャンルのテキストにおける HQ の用例を対象にして分析を行う。最初に HQ に接続詞 *sinon* などが後続して、(5)の構造が比較的はっきりと示されている用例の分析を行う。その後、動詞の形態や文脈の展開等の様々な形で non-P が文脈において示される用例の観察を行う。最後に、本稿の議論をまとめ、今後の課題を示す。

### 3. 明示的に non-P が示される場合

本節では(5)の構造が比較的はっきりと表れている事例を分析する。具体的には、接続詞 *sinon*

<sup>8</sup> <https://www.larousse.fr/dictionnaires/francais>

<sup>9</sup> Culioli (2018) も *que* にマルカッコをつけてはいるが、*sinon* を含む用例を示したうえで *heureusement* の機能について議論を行っている。

J'avais oublié mon porte-monnaie. *Heureusement (que)* tu es arrivé. *Sinon*, j'aurais dû rentrer à pied ! (*ibidem*, 125)

財布を忘れてしまった。幸いなことに君が到着した。もしそうでなければ、徒歩で帰らざるをえなかった。

および前置詞 sans が HQ と共起するタイプについて述べる。

### 3.1. 接続詞 sinon と共起する場合

(6)は柔道家 Clarisse Agbégénou に対するインタビューからの引用である。この引用部分の前では、この人物が処罰を受けたことが述べられている。

(6) Je pense que je vais rester dans mon petit cocon, avec ma fille. **Heureusement qu'elle est là, sinon j'aurais tapé du poing sur la table plus souvent.** Elle m'apaise.<sup>10</sup>

私は娘とからに閉じこもろうと考えています。幸いなことに、彼女がいます。もしそうでなければ、より頻繁に机をこぶしてたたいていたでしょう。彼女が私を落ち着かせてくれます。

ここでの P (que 節の内容に対応) における elle が照応するのは彼女の娘である。処罰を受けたことでショックは受けていたが、娘がいたことが幸いであったと述べられている。そして、sinon 以下では「娘がいなかったら」という non-P を仮定したうえで考えられる帰結が述べられている。non-P であれば感情をあらわにして、より机をたたいていただろうという仮定が行われている。

次の(7)ではいじめにあってきた少年が、そのいじめの当事者を告発したことが述べられている。HQ は引用符の中に生起している。

(7) Valentin, élève de 13 ans scolarisé dans les Yvelines, a décidé de briser le silence pour dénoncer ses harceleurs. Passionné de danse, le jeune ado avoue avoir ressenti de la "honte" de subir cette situation, mais a osé se confier. **"Heureusement que j'en ai parlé parce que sinon ça aurait pu aller beaucoup plus loin"**, a-t-il déclaré à France Bleu Paris.<sup>11</sup>

13 歳の Yvelines で学校に通う生徒である Valentin は沈黙を破りハラスメント当事者を告発することを決心した。ダンスに情熱を燃やす若者はこの状況を耐え忍ぶことに恥を感じたと告白するが、思い切って意中を打ち明けた「幸いなことに私はそれについてはなしました。なぜなら、もしそうしなければもっとひどくなりえたでしょうから。」このように彼は France Bleu Paris に述べた。

P に含まれる代名詞 en が照応するのは、いじめの内容やその当事者であると考えられる。ここでは話をしたことが幸いであったと述べられたのちに、parce que によって「なぜ話をしてよかったのか」ということについて理由が述べられている。前例とは異なり、parce que という別の表現の後に sinon は生起している。sinon 以下が示すのは、もしいじめについて打ち明けなかった場合

<sup>10</sup>[https://www.lemonde.fr/sport/article/2023/05/07/clarisse-agbegnou-heureusement-que-ma-fille-est-la-sinon-j-aurais-tape-du-poing-sur-la-table-plus-souvent\\_6172389\\_3242.html](https://www.lemonde.fr/sport/article/2023/05/07/clarisse-agbegnou-heureusement-que-ma-fille-est-la-sinon-j-aurais-tape-du-poing-sur-la-table-plus-souvent_6172389_3242.html)

<sup>11</sup><https://www.francebleu.fr/infos/education/harcelement-scolaire-heureusement-que-j-en-ai-parle-parce-que-sinon-ca-aurait-pu-aller-beaucoup-plus-1637232173>

に考えられる状況である。そして、その場合にはよりいじめが過激化したであろうということが述べられている。

### 3.2. 前置詞 sans と共起する場合

Guimier (1998, 171) は non-P を示す表現のパターンの1つとして、*sans ça* および *sans quoi* を挙げていた。ここでは *sans* 前置詞句が HQ と共起する事例を2つ分析する。

(8)はあるカフェの店主が引退することを報じた記事からの引用である。記事の中ではこれまでの様々な思い出が回想されているが、Covid-19の感染拡大により閉業を余儀なくされたことが引用箇所直前の文脈では言及されている。

- (8) La patronne avoue : « *Heureusement que* nous avons reçu les aides de l'État. *Sans quoi*, nous aurions fermé la boutique. Là, nous avons poussé un vrai ouf de soulagement. »<sup>12</sup>  
店主はこう打ち明ける。「幸いなことに国からの支援を我々は受けました。もしこれが無ければ、店を閉めていたでしょう。まさにその時、私たちは本当の安堵のため息をつきました。」

ここでは国からの支援により持ちこたえたことが述べられている。ここでの *quoi* は前方照応の表現であると解釈でき、HQ の *que* 節内部を表していると考えられる。そして、「もし国からの支援がなければ」という non-P を想定して、その場合には店を閉めざるを得なかったということが述べられている。

次の(9)では HQ と *sans ça* が共起している。

- (9) -Eh bien moi, dit Turandot, la guerre j'ai pas eu à m'en féliciter. Avec le marché noir, je me suis démerdé comme un manche. Je sais pas comment je m'y prenais, mais je dégustais tout le temps des amendes, on me barbotait mes trucs, l'État, le fisc, les contrôles, on me fermait ma boutique, en juin 44 c'est tout juste si j'avais un peu d'or à gauche, et heureusement parce qu'à ce moment-là une bombe arrive, et plus rien. La poisse. *Heureusement que* j'ai hérité de la baraque ici, *sans ça*.

-T'as pas à te plaindre en fin de compte, dit Gabriel, tu te la coules douce, c'est un métier de feignant que le tien. (Raymond Queneau, *Zazie dans le métro*, 582-583)

「そうかね、俺のほうは」とテュランドー。「戦争は有難くなかったね。闇取引のおかげで、さんざんな目にあつたよ。どういう廻り合せか、しょっちゅう罰金はくらわされる、政府だ、税金だ、統制だと、とことんしぼり取られる。あげくの果てに四四年の六月には営業停止さ、おかげですっからかんだ、でもそのほうがよかったよ、ちょうどそ

<sup>12</sup><https://www.ouest-france.fr/pays-de-la-loire/montreuil-juigne-49460/la-retraite-a-sonne-pour-le-couple-de-cafetiers-39399fd5-ec9b-4213-8cb1-d1584905a133>

こへ爆弾がおっこちて、元も子もなしさ。ついてないんだ。こんなボロ家でも相続できただけ幸せさ、でなきや」

「要するに不服を言えた筋合いじゃないさ」とガブリエル。「呑気な暮らしじゃないか、怠け者の商売さ、お前さんなんか」(生田訳 2021, 50)

この引用箇所ではテュランドーの戦争中の苦勞について語られている。そして、HQ によって、このような苦勞の中で幸いであったこととしてバラックの相続という事態が示されている。ここでは *sans ça* でテュランドーの発言が打ち切られている。ここでも *sans* 前置詞句によって HQ の後に *non-P* (バラックの相続が無ければ) を考慮する構造があらわれてはいるが、前例と異なり、*non-P* の仮定に基づく帰結の部分は述べられていない。

#### 4. 様々な形で示される *non-P*

ここまでは *sinon* や *sans* によって比較的、明示的に *non-P* が示されている事例を分析した。しかし、HQ の用例を観察すると、常にこうした形式が後続していないことがわかる。Guimier (1998, 171) もこのことを指摘しており、「反事実の命題 *proposition contrefactuelle*」が暗に示されている場合は、「テキストの論証的一貫性 *cohérence argumentative du texte*」のためにこれを再構築しなければならないと述べている。そして、条件法といった後続する表現に注目している (*idem*)。本節ではこの指摘をふまえて、*non-P* が動詞形態および文脈の諸要素を通じて解釈される場合について、用例観察を行う。

##### 4.1. 動詞形態との関係で *non-P* が示される場合

(10)は HQ に条件法が後続することで *non-P* が解釈上考慮されている事例である。この文脈ではポールが発話者のもとを去ったのちに、そのポールを診察したほうが良いという発話者の意見が示されている。その後に HQ が生起している。

(10) -Je te croirai si tu me dis la vérité, dit-elle en marchant vers la porte.

Je savais qu'il était parfaitement inutile de parler à Henri ; quant à Paule toute conversation amicale serait désormais vaine ; il aurait fallu la coucher sur mon divan et la mettre à la question ; **heureusement que** ça ne nous est pas permis de traiter quelqu'un que nous connaissons intimement : j'**aurais eu** l'impression de commettre un abus de confiance. (Simone de Beauvoir, *Les mandarins II*, 197)

「あなたがほんとうのことを伝えてくれれば信じるわ」と彼女 (ポール) はドアのほうへ歩いて行きながら言った。

私には、アンリに話しに行ったところで何にもならないということがわかっていた。一方、ポールのほうはこれからどんなに親切な気持で話をしても、無駄だろうと思った。ポールを私の長椅子の上に寝かせて、診察するべき状態になっているのだった。しかし、

幸い、私たち精神分析医にはごく親しくしている人たちを扱うことは許されていないのだ。もしそれをしたならば、私は背信を犯すような気持ちにさせられただろう。(朝吹訳 1975, 2, 171, 本稿筆者がマルカッコによる注記を行っている)

ここでは HQ を通じて、精神分析医である発話者には親しい間柄のポールを診察することができないことが述べられている<sup>13</sup>。そして、HQ ののちに「私は背信を犯す気持ちだった」という内容が条件法によって示されている。この条件法を解釈するためには、まず「親しい人を診ることが精神分析医に許されている」という non-P を想定する必要がある。この場合、発話者はポールを診断することが可能になる。そして、診断を行った場合に生じる感情が条件法によって述べられている<sup>14</sup>。日本語訳ではフランス語原文では明示されていない「もしそれをしたならば」という表現が付け加えられている。この翻訳には、条件法の機能はもちろんのこと、文脈の解釈において non-P を考慮させるという HQ の機能が反映されていると考えられる。

反事実の内容に基づく動詞形態という、たしかに前例のような条件法が思い当たる。しかし、その他の動詞形態が HQ とともに機能しているととらえられる用例も観察できる。(11)では、HQ に半過去が後続している。

(11) *Heureusement que* la cavalerie est arrivée. Une minute de plus, Lucky Luke *était* prisonnier des Indiens. (Berthonneau et Kleiber 2003, 1)

さいわい騎馬隊がやってきた。あと 1 分で、ラッキー・リュークはインディアンの捕虜になっていたところだ。(渡邊 2007, 152 による翻訳)

この種の半過去は渡邊 (2007) では「間一髪半過去 imparfait d'imminence contrecarrée」と呼ばれている。渡邊 (2007, 153) はこの例について、「条件をあらわす副詞句」*une minute de plus* を取り払うと解釈が変わることを指摘している。副詞句を取り払うと、単に「ラッキー・リュークはインディアンの捕虜となった」という事実の確認になってしまう。この例について HQ に注目して議論を行う。HQ が non-P を考慮する文脈を作り出すと考えると、「騎馬隊がやってこなかった」場合の帰結が後に述べられることになる。後続する内容は「ラッキー・リュークはインディアンの捕虜になっていたところだ」であるが、この間一髪回避された事態は non-P を想定した場合の

<sup>13</sup> この職業に関する事実は、距離は離れているものの、前文脈において以下のように明示されている。

Je l'interrompis : « N'essayez pas de me faire ma psychologie, je la connais dans les coins : je suis *psychiatre*. (Simone de Beauvoir, *Les mandarins I*, 60)

私は彼の言葉を遮った、「私の心理を解剖しようなどとなさっても無駄ですわ。私には隅々までわかっているんです。わたし、精神分析医ですから」(朝吹訳 1975, 1, 55)

<sup>14</sup> 「叙法的な条件法 *conditionnel modal*」について、Riegel et al. (1994, 317-320) は仮定の表現が接続詞 *si* を使って明示されるだけでなく、条件法が「暗黙の条件 *condition implicite*」とともに使用されることもあると指摘している。例えば、語調緩和の条件法の用例 *Je voudrais / J'aurais voulu rencontrer le président*. (会長にお会いしたいのですが) であれば、*si je pouvais me permettre* (もし許されるのであれば) のような条件を想定することができる (*idem*)。本稿では、HQ は形式的に生起しないこともある条件 non-P を考慮する(5)の構造を構築することで、条件法による意味構築と関係していると考えられる。

帰結であると考えられる。つまり、HQ および半過去を通じて、「騎馬隊が来なければラッキー・リュックはインディアンの捕虜になっていた」という想定がここで行われている。このように条件法以外の動詞形態についても、non-P の構築という点で HQ との関係を考慮する必要がある。

#### 4.2. 文脈において non-P が示される場合

以下では、ここまで述べてきたような特定の言語形式によって non-P が解釈上考慮されるものではなく、文脈の流れの中で non-P がとらえられる事例を分析する。

(12)はフランスで近年新設された進路選択システムである Parcoursup についての記事である。この記事では、システムに対する親や教師の苦悩が記述されている。

(12) Le lycée et l'association des parents d'élèves ont bien organisé des réunions d'information et des forums des métiers, mais l'essentiel était ailleurs. « Soyons clairs : j'ai tout fait avec ma fille. **Heureusement que j'étais là. Je me demande comment font les jeunes qui ne sont pas accompagnés** », résume-t-elle.<sup>15</sup>

リセや保護者の組合は情報交換のための集まりおよび職業に関するフォーラムを企画したが、本質的なところは他の場所にあった。「はっきりさせておきましょう：私は娘と一緒にすべて行いました。幸いなことに私がいたのです。付き添われていない若者たちはどうするのだろうかと思います。」

引用箇所 HQ を用いているのはある親である。娘の進路選択という重要な局面において、自ら介入できることが幸いであると述べられている。ここで後続する部分に注目すると、直説法におかれた動詞 *se demander* を中心とした間接疑問文が生起している。そして、特に名詞句 *les jeunes* にかかる *qui* 以下の関係節の内容は、「(親である) 私が居なければ」という non-P に類した内容を示していると考えられる。このようにして、サポートがない状態で子供たちだけに進路選択をさせることは困難であることが述べられている。ここでは文脈の流れの中で、HQ の後に non-P が考慮されていると考えられる。

次の(13)は *épicerie sociale* (社会保障食品店) に関する記事からの引用である。食品店にいる人々に対して取材が行われており、ここではある女性の発言が引用されている。

(13) Véronique, 53 ans, tâtonne encore dans les rayons. « Je ne viens que depuis un mois, dit-elle. Je suis en instance de divorce. J'ai dû fuir mon mari. Il m'a déjà retrouvé deux fois et m'a frappée à chaque fois. J'étais conjointe collaboratrice. C'est la chute. Je vis dans une caravane et j'ai tout

---

<sup>15</sup>[https://www.lemonde.fr/campus/article/2024/01/16/sur-parcoursup-le-casse-tete-de-l-orientation-pour-les-parents-heureusement-que-j-etais-la-je-me-demande-comment-font-les-jeunes-qui-ne-sont-pas-accompagnes\\_6211039\\_4401467.html](https://www.lemonde.fr/campus/article/2024/01/16/sur-parcoursup-le-casse-tete-de-l-orientation-pour-les-parents-heureusement-que-j-etais-la-je-me-demande-comment-font-les-jeunes-qui-ne-sont-pas-accompagnes_6211039_4401467.html)

perdu. *Heureusement que* l'épicerie sociale existe. »<sup>16</sup>

53 歳の Véronique はまだ売り場を探っている。彼女は言う「1 か月前から来始めたばかりです。私は離婚しようとしているところです。夫から逃げなければなりません。彼はすでに私を 2 度見つけて、毎回殴ってきました。私は協働配偶者でした。これは失敗です。私はキャンピングカーで生活し、すべてを失いました。社会保障食品店が存在してよかったです。」

HQ の前の部分では、この女性が過酷な状況におかれていることが述べられている。非常に追い詰められた生活を送っているが、この種の食品店の存在が幸いであったことが示されている。この HQ は女性の発言の末尾に位置している。したがって、non-P (社会保障食品店が存在しない) が後続文脈で示されるということはない。しかし、仮に non-P であったとするとすべてを失った女性にはいかなる支えもないと考えられる。すなわち、non-P であれば、*j'ai tout perdu* という前文脈にいかなる留保もつけることができず、単に彼女はすべてを失ったことになる。ここでは文脈の展開の中で non-P を考慮させる HQ によって、この食品店は最後の命綱として示されていると解釈できる。

次に引用する(14)は *Trésor de la Langue Française informatisé* が HQ の用例として示すものである<sup>17</sup>。ジャコは映画に行きたがっていたが、父親にマニャン家との散歩に連れていかれている。HQ はジャコとマニャン家の娘カミーユの会話において生起している。

- (14) -Je réfléchirai. Je réfléchirai. En tout cas dimanche prochain tu sors avec nous et les Magnin. Nous irons nous promener dans la forêt.  
-Flûte alors. » [...]  
« Tu as été au cinéma cette semaine ? demanda-t-elle.  
-Oui. Jeudi. Et s'il n'y avait pas eu la corvée de balade avec tes parents *j'y serais allé aujourd'hui aussi*.  
-Tu n'es pas gentil pour moi en disant ça.  
-Avoue que ce n'est pas rigolo de se promener avec les croulants.  
-Oui mais il y a moi !  
-C'est vrai. Mais quelle barbe quelle barbe à part ça. *Heureusement que* tous les dimanches ne sont pas pareils. La semaine prochaine au Rueil Palace on joue quelque chose de bien Les crimes des Borgia. (Raymond Queneau, *Loin de Rueil*, 93-94)<sup>18</sup>  
「うむ、考えておこう。とにかく今度の日曜日はみんなでお出かけだ。マニャンさんと

<sup>16</sup><https://www.ouest-france.fr/bretagne/ploermel-56800/reportage-jai-tout-perdu-heureusement-que-lepicerie-sociale-existe-a-ploermel-3be6d98c-889a-11ee-a1c0-8cef14bedf93>

<sup>17</sup> <http://atilf.atilf.fr/>

<sup>18</sup> *Trésor de la Langue Française informatisé* では部分的な引用が行われている。ここでは解釈が容易になるようにより広い文脈を引用している。

このご家族もいっしょだよ。森を散歩することになってる」(ジャコの父)  
 「ちえっ、なんてこった」(ジャコ)[...]  
 「今週、映画は行ったの？」と彼女(マニャン家の娘カミーユ)は尋ねた。  
 「行ったよ、木曜日に。きみのお父さんお母さんと散歩させられるんじゃないきゃ、今日  
 だって行くつもりだったんだ」(ジャコ)  
 「そんなこと言うなんて、ひどいじゃない」  
 「年寄り連中とお散歩なんて、つまんないと思ってるくせに」  
 「でも、わたしがいるじゃないの！」  
 「まあね。でもきみを別にすれば、ほんとにうんざりだね。日曜日がいつもこんなじゃ  
 なくてよかったよ。来週<ルイユ・パレス>でさあ、《ボルジア家の犯罪》っていう、面  
 白そうなやつやるんだ」(三ツ堀訳 2012, 44-47, 本稿筆者がマルカッコによる注記を行っ  
 ている)

この例における non-P は「日曜日がいつもこんなである」と解釈できる。形容詞 *pareil* が左方  
 文脈の内容を照応しているため、non-P はより説明的に言いかえて、概略「日曜日にいつも親の退  
 屈なことに付き合わされる」という内容に対応する。もし仮に non-P であったとすると、今回は  
 散歩によりかなわなかった映画を見に行くという事態の実現は今後も妨げられ、ジャコはうんざ  
 りしたままであったと考えられる。映画を見に行くということは前文脈で条件法 *j'y serais allé aussi*  
 によって示されている。実際にはいつも日曜日に退屈な用事があるわけではないため、映画を見  
 に行く可能性は今後あり得る。HQ の後続文脈でも映画の話題が続いているが、この話題を取り  
 上げることができるのは、HQ を通じて non-P があくまで仮定できることとして示され、実際に  
 は P(日曜日がいつもこんなではない) が確認されているからであると考えられる。

#### 4.3. HQ が記事タイトルに含まれている場合

ここまで言語形式や文脈を通じて non-P が取り上げられる事例を検討してきたが、最後に記事  
 タイトルに HQ が含まれる事例について検討する。タイトルが記事の内容を端的に示すものであ  
 るとすると、このような場合の HQ はどのように解釈できるのだろうか。

最初に、(15)の2例を分析する。この2例は構造的に類似しており、いずれも名詞句の形であ  
 る事態が生じていることが最初に述べられ、その事態についての発言が引用されている。その発  
 言において HQ が用いられている。

(15)

- a. Hausse de 10% des prix de l'électricité : « *Heureusement que* j'ai mes panneaux solaires »<sup>19</sup>  
 電力代 10%の値上げ : 「幸いなことに、私はソーラーパネルを所有している」

<sup>19</sup><https://www.leparisien.fr/economie/consommation/hausse-de-10-des-prix-de-lelectricite-heureusement-que-jai-mes-panneaux-solaires-18-07-2023-YARY3LURVRGZ7NRYCWNR43VX2E.php>

b. Inondations en Essonne : « **Heureusement que** j'ai trois barques »<sup>20</sup>

Essonne の洪水 : 「幸いなことに、私は 3 艇のボートを所有している」

述べられている事態はどちらも好ましくないものであると解釈できるが、その事態についてソーラーパネルやボートを所持することで対応が可能であることが述べられている。ここで non-P を想定すると、その non-P は生じた事態に適切な対応を行うことができないという帰結を導くと考えられる。つまり、(15a)であれば、ソーラーパネルの不所持は電力費値上げにただただ苦しむことを導き、(15b)であれば、洪水の状況でボートなどの道具が無ければ避難が難しくなる。このように、タイトルにおける HQ は、non-P を解釈上で考慮する構造によって、形式の面では端的ではあるが情報としては豊かなタイトルの作成に関わっていると考えられる。

最後に HQ のみがタイトルとして示されている記事を示す。この記事ではある人物が自身の母親の病気について語っている。

(16) « **Heureusement que** tu es là »<sup>21</sup>

幸いなことに、君がいる。

記事のタイトルはしばしば本文中の表現を引用して作られる。(16)はこのタイプに該当するタイトルである。(16)と同じ表現は本文中において(17)の形で生起している。HQ は母親 (elle で示される) の発言の引用である。ここで注目できるのは、HQ に条件法を用いた文が後続している点である。

(17) « Entre deux rendez-vous, confie-t-il, elle m'a dit : **Heureusement que** tu es là. Je **devrais** être morte. » (idem)

彼はこう打ち明ける「2つの予約の間に、彼女は私にこう言いました：幸いなことに君がいる。私は死んでいたに違いない。」

後続する箇所では、条件法によって「君が居なかったら」と解釈できる non-P が生じていた場合にあり得たものが示されている。したがって、本稿が仮定する non-P を文脈上で考慮させるといいう HQ の機能がここでははっきりと観察できる。(16)の HQ は、non-P が考慮された場合の解釈については本文を読めば理解できるという形で、前振りとして読者の解釈を導いていると考えることができる。

## 5. おわりに

<sup>20</sup><https://www.leparisien.fr/essonne-91/inondations-en-essonne-heureusement-que-j-ai-trois-barques-27-01-2018-7526247.php>

<sup>21</sup> <https://www.leparisien.fr/archives/heureusement-que-tu-es-la-06-11-2003-2004520998.php>

本稿ではHQが以下のスキーマを構築するという仮説から様々な用例の観察を行った。

(18=5) *Heureusement que P ; si non-P, alors Q (au conditionnel)*

この仮定を出発点とし、non-Pが接続詞 *sinon* や前置詞 *sans*、条件法・半過去の動詞形態、文脈の展開といった様々な形を通じて示されることを用例の分析から明らかにした。また、記事タイトルにおけるHQについては、(18=5)を想定することで形式的には端的でありながら、情報的には豊かであるという点をとらえた。

本稿では *heureusement* について2つの命題を接続する機能を指摘した先行研究の記述をより発展させるために、文脈の中で non-P を考慮する構造について検討した。そして、用例の分析を通じて、単に2命題を接続するというだけではHQの記述としては不十分であり、HQの作用域以降の内容についてもこの単位が作用しているという見方が様々な用例を分析するために有効であることを示した。

最後にHQについて残された研究課題として、*que* 節内部の統語現象について述べる。本稿では文脈におけるHQの機能を議論の対象としてきたが、こうした機能の構築を支えるHQという形態そのものの特徴について研究を行う余地があると考えられる。より具体的には、HQにおける *que* にどのような統語的特徴づけを行うのかという問いを検討することが有益である。朝倉(2002, 451)では、HQは *que* に関する項目において「連結語」としての用法の1つとして記述されている。この「連結」という記述からさらに議論を進めて、何らかの適切な統語的特徴づけに基づき文脈における機能構築を考察するという段階を踏んだ議論が不可欠となる<sup>22</sup>。

<sup>22</sup> 以下、注目に値する *que* 節内の統語現象を指摘する。最初に、HQは直説法を求めることがしばしば指摘されている (Furukawa 2005, 128, Gaatone 2012, 1735)。

a. *Heureusement qu'elle est repartie.* (Kayne 1976, 279)

幸いなことに彼女は再び出発した。

b. *\*Heureusement qu'elle soit repartie.* (ibidem, 280)

また、Furukawa (2005, 125-126) は *Je crois que* とは異なり、HQの節内での「テーマ化 *thématisation*」が難しいことを指摘している。

a. *Heureusement que Pierre est là.* (idem)

幸いなことに、ピエールはいる。

b. *?Heureusement que Pierre, il est là.* (idem)

幸いなことに、ピエールについていえば、彼はいると思う。

c. *Je crois que Pierre est là.* (idem)

私は、ピエールはいると思う。

d. *Je crois que Pierre, il est là.* (idem)

私は、ピエールについていえば彼はいると思う。

ただし、左方遊離が *que* 節内に見られる場合もあり、この場合はコントラストの意味が確認できる。以下の用例調査については Simon Tuchais 氏 (上智大学) から協力を受けた。記して感謝を申し添えたい。

a. *Les polardes, les excitées, on le sait, des emmerdeuses. Heureusement que toi tu es équilibrée, ça veut dire que je la bouclais sur mon métier.* (Annie Ernaux, *La femme gelée*, 174)

ガリ勉女、ハリキリ女、いうまでもないけど、ああいうタイプの女は実に閉口するね。幸いきみは変に突っ走ってないから助かるよ。それはいいかえれば、わたしが自分の仕事については口をつぐんでいたということなのだ。(堀訳 1995, 231)

b. CAL. -*Moi aussi avant, le whisky, je crachais dessus ; et je buvais du lait, moi, rien que du lait, je*

## 参考文献

- Abeillé, A. et al. (dir.) (2021) : *La Grande Grammaire du français*, Actes Sud.
- Anscombre, J.-C. (2016) : « Les constructions en *adverbe que p* en français : Essai de caractérisation sémantique d'une matrice lexicale productive », *Cahiers de lexicologie*, 108, pp.199-223.
- Anscombre, J.-C. (2017) : « Le *que* médiatif du français contemporain : Perspectives diachronique et comparée », *Revue Romane*, 53-2, pp.181-216.
- Bacha, J. (1998) : « “*Bien sûr que je viendrai*”, Remarques sur les adverbes construits avec une complétive », *L'information grammaticale*, 2 Numéro spécial Tunisie, pp.27-31.
- Berthonneau, A.-M. et G. Kleiber (2003) : « Un imparfait de plus ... et le train déraillait », *Cahiers Chronos*, 11, pp.1-24.
- Borillo, A. (1976) : « Les adverbes et la modalisation de l'assertion », *Langue française*, 30, pp.74-89.
- Culioli, A. (2018) : « *Heureusement !* », *Pour une linguistique de l'énonciation*, Tome IV, Lambert-Lucas, pp.125-133.
- Delahaie, J. (2011) : « L'illusion synchronique et les leçons de l'histoire : Interprétation sémantique d'un curieux couple faussement symétrique, *malheureusement / heureusement (que)* », *Revue de Sémantique et Pragmatique*, 29-30, pp.107-133.
- Delahaie, J. (2014) : « Les constructions en *adv. que p* : étude diachronique d'une tournure adverbiale particulière à partir du cas de *heureusement que p* », Anscombre, J.-C. et al. (dir.) *Médiativité, polyphonie et modalité en français*, Presses Sorbonne Nouvelle, pp.223-241.
- Delahaie, J. (2018) : « Entité lexicale : *heureusement* », Anscombre, J.-C. et al. (éds.) *Opérateurs discursifs du français*, 2, Peter Lang, pp.249-261.
- Furukawa, N. (2005) : « *Heureusement qu'il est là* : construction à élément thématique propositionnel », *Pour une sémantique des constructions grammaticales*, Duculot, pp.123-133.
- Gaetone, D. (2012) : « Anatomie d'une pseudo-phrase complexe : le cas de *heureusement que P* », *3<sup>e</sup> Congrès Mondial de Linguistique Française, SHS Web of Conferences*, 1, pp.1731-1742.

---

peux vous le dire ; des litres, des barriques ; avant de voyager. Mais, depuis que je voyage, tiens : leur saloperie de lait en poudre, leur lait américain, leur lait de soja, il n'y a pas un poil de vache qui entre dans ce lait-là. Alors, bien obligé de se mettre à cette saloperie. (Il boit.)

LÉONE. -Oui.

CAL. -**Heureusement que cette saloperie-là** on la trouve partout ; pour ça, je n'en ai jamais manqué, dans aucun coin du monde. Pourtant j'ai voyagé ; et vous pouvez me croire. Vous avez voyagé ? (Bernard-Marie Koltès, *Combat de nègre et de chiens*, 38-39)

カル おれも以前は、ウイスキーを吐いていたものさ。それで、牛乳を飲んでいて、おれ、牛乳だけを、な、あんたにはいってもいい、なんリットルも、大樽で、あちこち渡り歩く前。が、旅に出てからというもの、ふん、やつらのくそ厭ったらしい粉ミルク、やつらのアメリカ・ミルク、やつらの豆乳、その手の牛乳には雌牛の尻尾だって入ってやしない。それで、こっちの粗悪物をはじめなくちゃいけなかったというわけさ (飲む)。

レオーヌ そう。

カル 幸い、こっちの粗悪物はどこでも見つけられる、こればかりは世界のいたるところ不足するということはない。とにかく、おれは旅したんだ、信じてくれていい、あんた、旅行したことは？(佐伯・西訳 2015, 43-44)

- Grevisse, M. et A. Goose (2016) : *Le Bon Usage*, 16<sup>e</sup> édition, De Boeck Supérieur.
- Guimier, C. (1998) : « Pourquoi peut-on dire *Heureusement que Pierre est parti*, mais pas *\*Malheureusement que Pierre est parti ?* », *Revue de Sémantique et Pragmatique*, 3, pp.161-176.
- Kayne, R. (1976) : « French Relative *Que* », Luján, M. et F. Hensey (eds.) *Current Studies in Romance Linguistics 4. Texas Symposium on Romance Linguistics*, Georgetown University Press, pp.255-299.
- Lamiroy, B. et M. Charolles (2004) : « Des adverbess aux connecteurs : *simplement, seulement, malheureusement, heureusement* », *Travaux de linguistique*, 49, pp.57-79.
- Le Goffic, P. (1993) : *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.
- Molinier, C. et F. Levrier (2000) : *Grammaire des adverbess : Description des formes en -ment*, Droz.
- Nølke, H. (1993) : *Le regard du locuteur*, Kimé.
- Paillard, D. (2021) : *Grammaire discursive du français : Étude des marqueurs discursifs en -ment*, Peter Lang.
- Riegel, M. et al. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France.
- 朝倉季雄 (2002) : 『新フランス文法事典』 白水社.
- 中右実 (1980) : 「第4章文副詞の比較」 國廣哲彌編 『日英語比較講座第2巻文法』 大修館書店, pp.157-219.
- 宮腰駿 (2023) : 「フランス語における文頭位置の-ment型副詞に関する一考察」 『ロマンス語研究』 56, pp.47-62.
- 渡邊淳也 (1995) : 「連結辞と発話の階層的構成—*donc, alors, aussi, ainsi* の比較から—」 『フランス語学研究』 29, pp.25-37.
- 渡邊淳也 (2007) : 「間一髪の半過去 (*imparfait d'imminence contrecarrée*) をめぐって」 『文藝言語研究 言語篇』 52, pp.151-175.

#### 用例および翻訳の出典

- De Beauvoir, S. (1954) : *Les mandarins*, I-II, Collection Folio 769-770, Gallimard.
- 朝吹三吉訳 (1975) : 『ボーヴォワール著作集第8巻 レ・マンダラン\*』 人文書院.
- 朝吹三吉訳 (1975) : 『ボーヴォワール著作集第9巻 レ・マンダラン\*\*』 人文書院.
- Ernaux, A. (1981) : *La femme gelée*, Collection Folio 1818, Gallimard.
- 堀茂樹訳 (1995) : 『凍りついた女』 早川書房.
- Koltès, B.-M. (1989) : *Combat de nègre et de chiens suivi des Carnets*, Les Éditions de Minuit.
- 佐伯隆幸, 西樹里訳 (2015) : 『黒人と犬どもの闘争／プロローグ コルテス戯曲集3』 れんが書房新社.
- Queneau, R. (2006) : « *Loin de Rueil* », « *Zazie dans le métro* », *Romans II (Œuvres complètes, III)*, Gallimard.
- 三ツ堀広一郎訳 (2012) : 『レーモン・クノーコレクション⑥ルイユから遠くはなれて』 水声社.
- 生田耕作訳 (2021) : 『地下鉄のザジ新版』 中央公論新社.

(みやこし しゅん / 東京大学大学院博士後期課程)